平成七年　中西播地区小・中学校　書写教育研究大会

講演『今なぜ書写教育か』　　小竹光夫先生

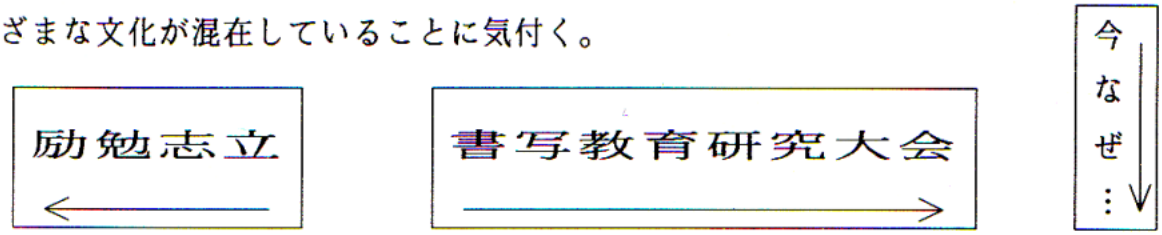
1995.10.31(火)

「姫路に出稼ぎに行ってくる。」とおっしゃる小竹先生。大学以外でのお姿を拝ませていただくチャンス到来…。当日は、朝から小竹ゼミ生だけが正装してそわそわそわそわ。講義もそこそこに、三台の車を駆り出して行って参りました。

着いてまずびっくりしたのは、講演を聞く小・中学校の先生方の多いこと。駐車場と化した運動場の車の多さもさることながら、体育館に所せましと並べられた椅子がほとんど埋まってしまっていたのには、圧倒されました。この人達を眠らせる事もよそ見させる事もなくしゃべり続けられる小竹先生って、やっぱり偉大な方です。

講演の内容は、普段講義を受けている私たちにはすんなりと入ってくることでしたが、そうでない大半の先生方にはきっと驚きの連続だったことでしょう。以下は、講演の内容の概略です。かなり羅列的な記録となることをお許し下さい…。

私たちは、文字言語の文化の中で生きている。この講演を行っている体育館にもさまざまな文化が混在していることに気付く。



「なぜこのような現象が存在するのか。」…こう考えることが、すべてのスタート地点となる。「他の教科がどんどん横書きになる中で、なぜ国語科だけが縦書きを保ち続けるのか。」「国語を縦書きで教えることの必要性は何であるか。」等々…。現在の社会を見渡すことによって得られるものは大きいはずである。

【情報化と国際化の中で】

最近になってよく口にされる「情報化」「国際化」ではある。しかし、中国から文字が伝えられたときを第一次の「情報化」「国際化」と考えれば、その後今日まで何度となく繰り返されてきた現象とも言えよう。

我々は、文字に対してあまりに不用意に接し続けてきたのかもしれない。例えば日常的に、「日本のことをＪＡＰＡＮと言われるのはなぜか」といった疑問を抱くことは少ない。これは「日本（にほん・にっぽん）」と書かれたものを、中国では「ジッポン」と読むことから来ている。それに関連してＣＨＩＮＡについて考えてみる。日本ではＣＨＩを「シ」として「支那（しな）」と読んできたが、さらに短く読むと「シン」すなわち「清」ということになる。中国は、今もって厳然とした「漢民族支配国家」であるということができるわけである。その漢民族の文字である「漢字」。その成立過程において込められた呪術性・生活性を取り上げて、悪魔の文字と言われることもあったが、果たして本当にそうなのであろうか。また、「書は人なり」と言われ、手書き文字の巧拙が人格を決定すると考えられがちであるが、本当にそうなのか。文字に関する疑問も、考え始めるときりがない。

「情報化」そのものの例としては、ワードプロセッサ・電子手帳などがまず掲げられる。これらの機器により、情報が活字として整斉と蓄積されていく。その中で、書写・書道は生き残らなければならない。ところが学校の教師にしても、書写と書道の違いの明確な把握なしに、混用していることが多い。その違いについての説明を求められても、毛筆のイメージの有無を挙げたり、果ては完全に同義であるととらえていたりする。この書写と書道に対するイメージだけでなく、教師の持つ情報化・国際化のイメージというのは、非常に曖昧なものではないだろうか。

【国語と書写】

手書き文字というのは、書き手の感情が表面的な印象として出ることが多分にある。そのため、内容のみを読み取るということが困難となる。我々は、そのような難しさを内包したものを教材（題材）として扱っていることを認識する必要がある。

また、国語と書写の関係について考えてみる。まず、国語ができるようになるにはどうすればいいのかと聞かれたとき、明確な答えが出ないことが多い。結局、本や新聞のコラムを読む習慣をつけるようにといった即効性も害もないアドバイスで終わることになる。しかし、そのような曖昧な在り方で、国語の教師として成り立つのであろうかという疑問は残る。これに対し、書写については、文字に関する正しい知識と技術を身に付けるために、ドリル的な反復練習をすればよいという方法論的な存在理由がある。そのための興味・関心をどのように導き出すかが問題となるのである。

自分の名前を膝の上に書いてみて下さい。

こう言われ、実際に書き始めたとき、すでに罠にはまっている自分に気付くことができるだろうか。我々は、空書にせよ膝や机の上にせよ指で文字を書こうとすると、必ずと言っていいほど人差し指を用いる。つまり、「文字認識は人差し指で行う」ということを、我々は無意識のうちに知っているのである。あるいは、螺旋運動一つを取っても右回りが日本の文化であり、左回りは非常に苦手であるということを知る機会はあまりない。しかし、平仮名を見ても、難しいとされるのは、左回りを中心とした「む」「ひ」「を」などであるという事実がある。これらは、自分が知っていれば、興味・関心を抱かせるきっかけとなり得るものであろう。

人間は頭の中に文字の像を描き、それを活用して文字を読む。その際、頭の中で結ぶ像は、できる限り正確なものがよいことは言うまでもない。正確な像を頭に覚えさせるため、ただ文字を眺めるだけでなく、手で書いていくのである。これこそが文字を手書きすることの必要性であり、書写の必要性に他ならない。このことを把握し、その上で文字を扱うためのマニュアルは、やはり読まなければならない。それが書写における方法論である。

【教えるために学ぶ】

子どもに学習に対する興味・関心を抱かせるためには、まず教師自身が、日常的にごく当たり前だと思っていることについて、「なぜだろう」と見直すことが必要となる。子どもが「なぜ？」と聞いてきたときに、教師が明確な答えを出せずに、「いい質問だね。自分で調べてごらん。」と繰り返すだけでは、子どもは次第に教師に対する期待を捨て、「この先生には何を聞いてもだめだ」とあきらめるようになるだろう。また、教師の明確な視点という観点で考えると、学習成果に対する評価ということも関わってくる。書く文字を提示し、「書けたら持っておいで」という指示により、先生が丸をくれたらそれで終わりという「合格制」では、自己評価の姿勢（自己教育力）は身に付かない。いつまでたっても他者依存でしかないのである。姿勢図についても同様である。常に鏡を横に置いて授業をするわけにはいかないのに、現行の教科書などに掲載されているのは他者によってしか確かめることのできないものである。自分で矯正できる図や指導を考えなければならない。

【これからの書写教育】

鏡文字を書く子どもについて、自らの専門分野からどのような指導を行いますか。

この問いから考えなければならないことは、現場の教師一人一人が専門分野を持って

いなければならないということと、その立場から明確な指導を行うことができるかということである。鏡文字を書く子どもというのは、文字の形態についての確証を持っているのではなく、「こうではないか」という推測によっているところが大きい。ここでのポイントは「目」である。書かれている文字を目で見、それが頭の中に像を作ったとき左右逆になる。文字習得期の子どもは、頭の中の像の左右をもう一度入れ替えることなくそのまま表面に出してしまうため、鏡文字の現象が起こる。このような現象に対応する指導というのは、書写の広さ・大きさでもあり、価値でもある。ただ文字の書き方といった技術の習得だけに終始していたのでは、効率という点でワープロなどに負けてしまうことになる。しかし、効率・処理速度という見方を離れることが必要なのではないか。コンピュータはその速度を持って端から順番に見る。人間は速度には限界があるから広く全体を見渡せばいいのである。認識を転換することによって、書く技法＋αがいかに大切かを把握することができるだろう。

今や国民的ヒーローとなったイチロー。そのイチローの振りは、他の人から見ると正しくないものかもしれない。しかし、その振りでイチローはヒーローとなったのである。人には人それぞれの正しさがあるということが言えるのではないだろうか。個性が重視される時代である。しかし、教師の側の正しさへの理解には、二つの道があるのではないか。一方は、正しさはいつでも一つしかないとする道である。他方は一人一人の適性・能力を認め、すべてが正しいとする道である。子どもすべてを正しいとするということは、子どもすべてを把握しなければならないことであり、同時に個性を大切にするということでもある。ただ、それは教師にとっては大変なことではある。

【今なぜ書写教育か】

今まで自分が考えてきた書写教育で、これからの時代を生き残れるのかということを考える必要がある。自分の認識の中で、書写教育がワープロなどに負けるようでは、それは間違っていたと認めざるを得ない。この新たな認識を、実際の教育の場でどのように活用するかということを考えていかなければならない。それだけでなく、子どもの個性・適性・能力に対して、どのように指導していくのかという教師の姿勢が問われるところである。正しさはいくつもあり、すべてが個性なのである。

今、子どもはどのような言語生活を送り、教師はどのような指導（教育）を望むのだろうか。もう一度考えてみなければならない。